

公益財団法人 松園尚己記念財団

東京2020オリンピック・パラリンピック大会ボランティア活動支援事業 参加者レポート

「活動を通しての感想」

服部有咲 長崎外国語大学

担当:テコンドー/プラカード (幕張メッセ)

まずはじめに、オリンピック、パラリンピックに向けた全国外大通訳セミナーに参加したことを筆頭に、10年間空手道で培った忍耐力、英語と中国語のスキルをオリンピックという場所で実力を試し、更なる挑戦がしたかったからです。

長崎外国語大学では一年時に空手道部を自ら立ち上げ、スポーツを通して多くの留学生の生徒と交流を図りました。

私は有段者でもあり、高校時代は長崎県代表で道場の九州大会に出場しました。

そこで、自分の力で役に立てることは何か？将来を担っていく若い世代へ引き継げるものはなにか？と考えた時にオリンピックボランティアという経験を通して選手のサポートを全面的に支援していきたいと思いました。

全国外大通訳セミナーでは、神田外国語大学にて講義を受け、とても衝撃を受けました。

自分よりレベルの高い生徒と同じ空間、同じ時間に、同じ内容を勉強させてもらうことができ、私も卒業するまでには、れっきとしたバイリンガルになりたい！と強く思いました。

そう大学一年時に意気込んでいた中、五輪延期と聞き正直残念な気持ちが勝りました。

しかし、その期間中なにができるだろう？と考えたわたしは台湾にて二言語交換留学をすることを決意し、長崎外国語大学からたった1人で台湾台北市にある淡江大学というところで学部生として入りました。

日本人ネイティブが二言語を取得する大変さ、同アジア圏でのカルチャーショック、中国情勢や香港台湾デモが相次ぐ中、国境を超えて私は言葉を通して日本と諸外国との架け橋になっていきたい。映像やテレビでみている世界だけでは、伝わらないリアリティを間近で体験したいと思いました。

そこで、留学期間中は政治に関する世論調査を若者をターゲットにしてアジア諸国で比較する自由研究課題に取り組み、オリンピックに必要な応用的な語彙力は勿論、探究心、好奇心を磨くことができました。

帰国後は、NBC長崎放送局にてアルバイト入社をし、メディアの在り方や映像コンテンツが配信されるまでの流れや臨機応変に対応していく、ボランティアに多く求められる行動力や言葉選びの重要性を学びました。

オリンピックが2021年に決定したということで、私は京都外国語大学へ長崎外国語大学の代表として国内留学に行くことを決意しました。

理由の一つに、全国外大セミナーで強く感銘を受けた京都外大の先輩がいました。英米学科で初対面の他大学の生徒にも公平に分け隔てなくグループワークを率先するリーダーを担当されていました。

私も、将来人々を言葉で引っ張っていけるような国際的に活躍できる人材になりたいと強く思いました。

オリンピック活動期間中は、何万人という人たちが応募し、数十個もある部門の中で、プラカードを数ある役職の中でやらせて頂きました。テコンドーでは約5名ほどしか選考されないので、大変有り難く思っております。

プラカードという選手や監督をリードしていくポジションに就くことができ、胸を張って堂々と頑張ろうと意気込んで活動をしました。

また、テコンドーという空手道とおなじ武道競技を通して、スポーツに対する選手たちが何年も積み重ねてきた努力や熱い思いを間近で感じることもできるいい経験になりました。

活動を終えて、努力を尊重すること、言葉の壁よりも心の壁を少なくする工夫、非言語的コミュニケーションの大切さを知りました。

最後に将来は、日本の中小企業や機関、地域住民の生活を下から支える金融機関に就職が決まっています。

日本の地方情勢は勿論ですが、国際経済にも視野を向け、これからを担っていく子供たちの住みやすい世界、いまの日本を創り上げてきた先人への尊敬を忘れずに、まずは地域単位での手助けを仕事と外国語を通して努力していく所存です。